

100年後の日本を考える ～獣を通して見た日本の自然～ (インタビュー要旨)



猟師工房代表 はらだ ゆうすけ 原田 祐介

1 起業の経緯

僕は元々外資系アパレル企業で働いていましたが、趣味で10年程狩猟をしていました。子供が育ち上がったのを機に、残りの人生、好きなことをやって生きてみようと考え、狩猟で起業することにしました。準備として林業の会社に入り、山のスキルを身に付け、埼玉県で独立起業しました。

しかし、独立起業してみて、狩猟は職業として成立していないことに気がきました。例えば運送業なら、A地点からB地点まで物を運ぶと運送料が発生するような仕組みがあります。しかし、狩猟にはなかったもので、10年間仕組み作りをしました。現在は、従業員を何人か抱えられる会社になり、獣にまつわることで生計が立つ状況を作れました。

2 現在の事業とコンセプト

有害駆除頭数を比較すると、埼玉県は大体5,000頭、千葉県は50,000頭で約10倍です。鳥獣被害対策をテーマに、君津市が旧香木原小学校の貸付の公募を行い、それに応募する形で、「猟師工房ランド」をオープンし、拠点を千葉県に移しました。施設は店がメインになっており、「頂いた獣の命を100%余すことなく使おう」というコンセプトで経営しています。シカ、イノシシ、キョン、アライグマ、タヌキ、ハクビシン、サルの肉を扱っています。千葉県では50,000頭のうち1,500頭しか利用されず、48,500頭がゴミとして捨てられています。頭骨等の骨や皮などを、加工して

販売しているのも、頂いた命を100%使い切るという視点からです。

グラウンドには、ドッグランとキャンプ場、簡単な解体施設があります。血抜きを失敗してしまった個体等、人間には不向きなものをペット用として加工して販売しています。犬も大事なお客様なので、ドッグランを作りました。キャンプ場はソロキャンプ専門です。地域の方から「若者が来て、花火とか大騒ぎされるといやだ。」というお声もいただいたので、20歳未満は禁止にしました。

3 日本の自然の現状

山は、薪や炭を利用しなくなって放置されています。一見豊かに見えますが、獣を通して見た日本の自然は、決して健全なものではありません。山に誰も入らないと葉が茂って下草が生えなくなります。下草が生えないから獣たちは仕方なく下草が生えている道路の際に出てきます。その時に交通事故に遭ったりします。また、シカ、イノシシなどの獣は、毎日山の中から沢まで水を飲みに行きます。例えば、昔は山に2～3頭だったシカが、今は10～20頭います。毎日たくさんの獣が同じ獣道を通るので大きく窪み、集中豪雨等で水が獣道をどんどん流れ、表面の泥を洗い流す洗掘という状況が起きます。洗掘により、地中に雨水が入り込み表層崩壊するという現象が起こっていると僕は考えています。あまり研究は進んでいないのですが、獣が増え過ぎることには、様々な弊害があるはずですが、

から一定数減らさないといけないのですが、獲られた命がゴミとして捨てられることは防がなければならないと感じています。

4 「命の授業」について

ビジネスとして、都会の大人向けに獣の解体を教える等の事業をやっていました。しかし、獣の解体を教えると、素人が触るので、食品衛生法等からその後の利活用ができなくなります。そのうち、大人の自己実現の道具に生き物の命が使われることが、とても嫌になってきました。また、仲間の猟師で、大きな会社の取締役の方が、「今、日本の企業は100年後を見据えた取組に力を入れている。君の立場から100年後というものを考えてみたらどうだ。」というご助言をいただきました。

100年後の日本の自然をより良いものとして継承していくためには、大人より、何も予備知識がない子供たちにリアルなことを伝える方が意味があるのではないかと思いはじめました。実際に獣を殺すというのは現実的ではありませんが、日常食べる肉がどういう経緯を経て店に並んでいるのかを知ることは、人生の中で重要な意味があるのではないかと思います。子供たちにありのままを知らせることを通して、獣との付き合い方を共に考えて行きたいと思い子供たちに向けて「命の授業」を始めました。

5 持続可能な獣との付き合い方

今後、より良い自然を継承していくための持続可能な環境を作るには、若い人が参入して、獣の問題に取り組むことが必要です。志ある若い人はたくさんいます。テレワークで企業に勤めながら、獣害対策を希望して君津に移住する人も出てきました。先祖伝来の土地を守る上で、狩猟技術の継承、若い担い手の育成等の必要性を地元の皆様をはじめ色々

な方々に話をしています。

今、僕が行っている事業は、行政向けの獣についてのコンサルテーション、解体施設の運営、簡易解体施設のキット販売、ジビエの流通、ハンター保険の提供などです。色々な取組の中で雇用を生み出し、若い人たちが猟師を職業として生活していくことができるためのステージを作っています。

6 未来へのプラン

僕は、頂いた命を1頭でも多く、余す所なく使えるように、獣に特化した道の駅を作ろうと考えています。小売りとして物を売るだけではなく、子供たち向けの自然教育もできるような複合施設にしようと思っています。

今、県では「房総ジビエ」という千葉の獣の肉をブランド化する取組をしています。僕は、獲られた獣の多くがゴミとして捨てられている実態を踏まえ、「房総ジビエ」の取組が自然の中で循環していく方策を提言させていただきたいと考えています。そして、命の循環に必要な、職業としての猟師の雇用を生み出し、獣のことで地域に貢献をするなど、複合的に色々なことができる仕組みを作りたいと思っています。

今、コンプライアンスがとて厳しくなっており、何かあればすぐ訴訟になるような世の中です。新しいことがやりにくくなっています。多くのクレマーが、クリエイターやイノベーターを潰すような世の中になっている気がしてなりません。100年後の未来を見据えたとき、本当にこのままでいいのかと思います。大変なこととは思いますが、先生方を始め教育関係の皆様には、新しいことへのチャレンジを応援できる社会を作っていただければと思います。僕は僕の立場でそれを実践していこうと思っています。